データから見る幼児教育

「学びに向かう力」を育む家庭の関わり

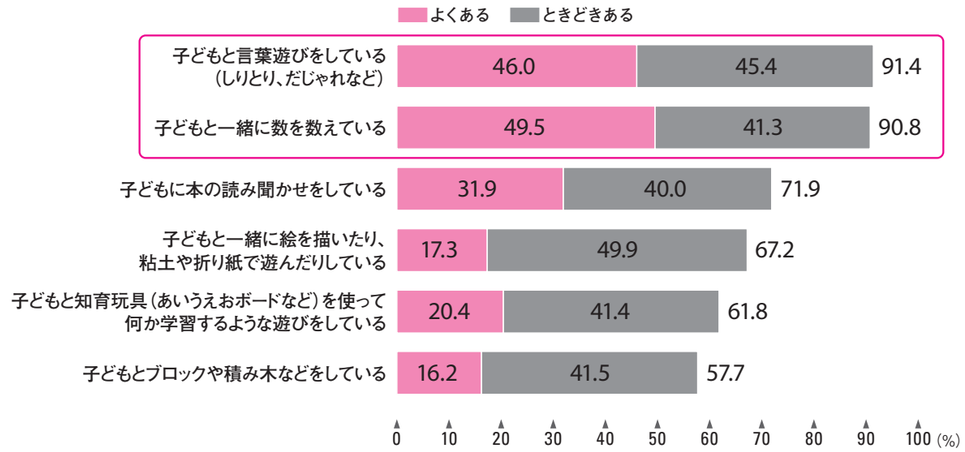
ベネッセ教育総合研究所は、4～5歳児をもつ保護者を対象に、2014年1月に「幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査」を実施しました。この調査の目的は、3歳児期から小学1年生までの4年間、同一の子どもについて継続して、子どもの学びの様子や、母親の意識を捉えることで、この時期に大切な子どもの育ちや保護者の関わりを明らかにすることにあります。今回は、この中から4～5歳児の調査をご紹介します。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用・転載される際には、調査名称を記載してください（例：ベネッセ教育総合研究所「幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査（4～5歳児）」（2014））。

母親が5歳児の子どもと言葉遊びをしたり、一緒に数を数えたりする割合は約9割。

Q 日頃、お子さまとの生活の中で、あなたは以下のことについて、どれくらいしていますか。

図1 日頃、親子でやりとり遊びをする頻度



研究員解説 追跡調査の第2弾となる今回の分析では、保護者の養育行動と子どもの発達との関連性を調べるために、教育的な内容を含む親子での遊びや読み聞かせなどの養育行動を「知的なやりとり遊び」（以下やりとり遊び）と総称して分析しました。「やりとり遊び」とは、ここでは図1で示す6項目を指しています。

図1からは、多くの母親が5歳児の子どもと一緒に、言葉遊びをしたり数を数えたり、一緒にお絵かきをしたりするなど、やりとりを伴うような多様な遊びをしていることがわかりました。

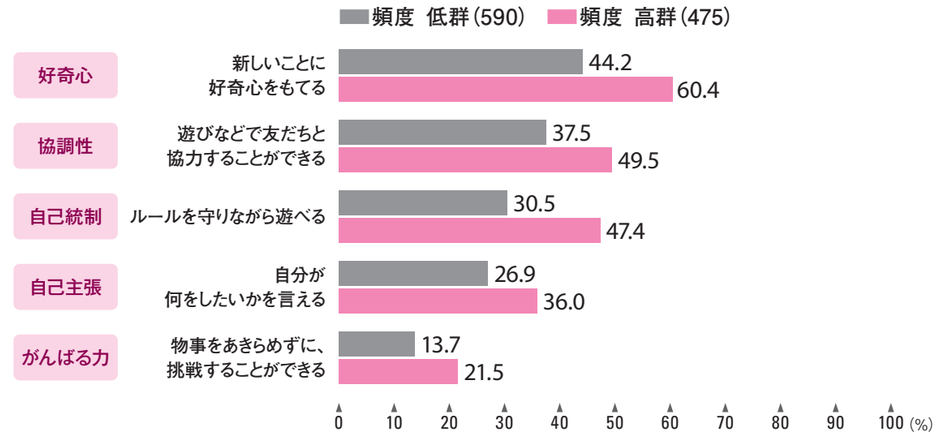
※本分析では、回答者の99.7%が母親であったため、母親に限定して分析をしています。

真田美恵子研究員◎ベネッセ教育総合研究所主任研究員。幼児教育・保育や子育てなど、就学前の園や家庭を対象とする調査研究に携わる。

親子で“知的なやりとり遊び”をよくする家庭の方が、5歳児の「学びに向かう力」「文字・数・思考」の力が高い。

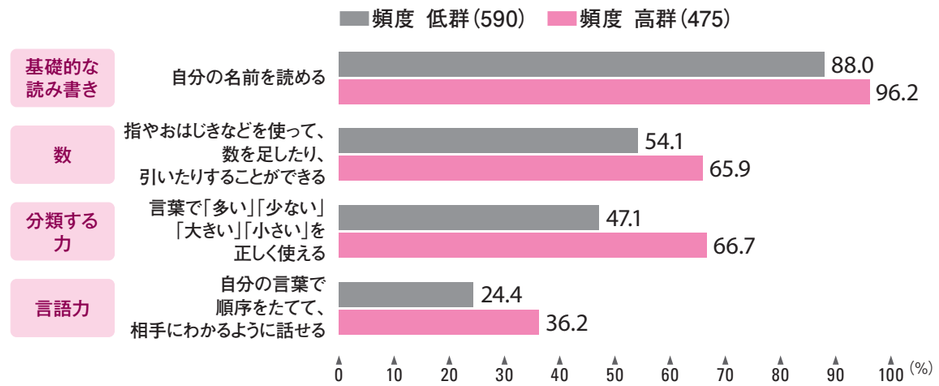
Q 現在、お子さまは以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。

図2 5歳児の「学びに向かう力」（親子のやりとり遊びの頻度別）



※「とてもあてはまる」の割合。
※「学びに向かう力」は、5つの領域（好奇心・協調性・自己統制・自己主張・がんばる力）に関わる24の質問項目から構成される。各領域を代表する質問項目を1つずつ図示。
※「やりとり遊びの頻度（低群・高群）」は、5歳の子どもとの遊びや読み聞かせ（図1で示した6項目）について、「よくある」を4点、「ときどきある」を3点、「あまりない」を2点、「ぜんぜんない」を1点として合計値を得点化し、サンプル数がほぼ等分になるように2区分した。1項目でも無答不明の人は除く（以下同）。

図3 5歳児の「文字・数・思考」（親子のやりとり遊びの頻度別）



※「とてもあてはまる」の割合。
※「文字・数・思考」の力は、4つの領域（基礎的な読み書き・数・分類する力・言語力）に関わる23の質問項目から構成される。各領域を代表する質問項目を1つずつ図示。

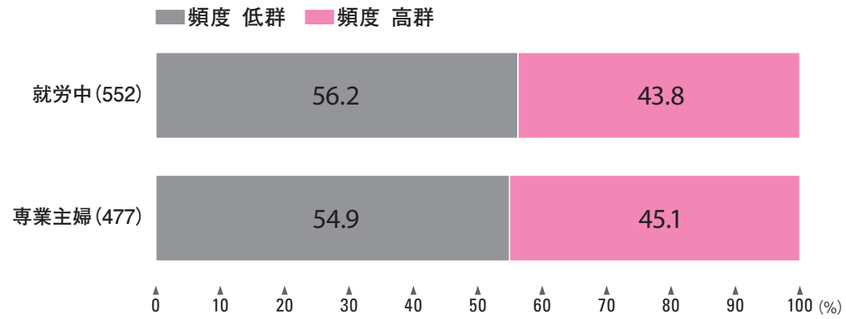
研究員解説 「やりとり遊び」と子どもの発達との関連性について、やりとり遊びの頻度が低い群と高い群に分けて調べました。図2は、好奇心・協調性・自己統制・自己主張・がんばる力といった、学びの土台となる「学びに向かう力」との関連性を見たものです。例えば「新しいことに好奇心をもてる」割合は、やりとり遊びの頻度が低群の子どもでは44.2%、高群の子どもでは60.4%と、高群の方が約16ポイント高くなっていました。図3は、「文字・数・思考」の力との関連性を見ています。例えば「自分の名前を読める」割合は、低群の子どもでは88.0%、高群の子どもでは96.2%と約8ポイントの差が見られました。

やりとり遊びの頻度が高群の家庭の子どもの方が低群よりも、「学びに向かう力」「文字・数・思考」の力の数値（「とても」の割合）が高い傾向が見られました。

“知的なやりとり遊び”の頻度は、母親の就労の有無や最終学歴によっては変わらない

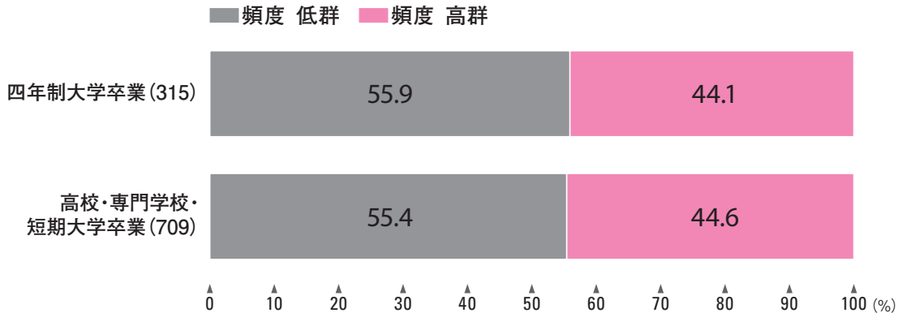
Q 日頃、お子さまとの生活の中で、あなたは以下のことについて、どれくらいしていますか。

図4 やりとり遊び頻度（母親の就労の有無別）



※就労中は「正規の社員・従業員」「派遣・契約社員」「パート・アルバイト」「フリー（自営業・在宅ワークを含む）」を含む。

図5 やりとり遊び頻度（母親の最終学歴別）



※「高校・専門学校・短期大学卒業」には「中学校」「高等専門学校」卒業を含む。また「四年制大学卒業」には「大学院（六年制大学を含む）」卒業を含む。

研究員解説 図4は、やりとり遊びをする頻度と就労の有無との関連性を見たものです。やりとり遊びが高群の割合は、母親が「就労中」の場合で43.8%、「専業主婦」の場合で45.1%と、ほぼ差がありませんでした。同様に、母親の最終学歴とやりとり遊びの頻度の関連性を見たものが図5です。頻度が高群の割合は、母親の最終学歴が「四年制大学卒業」の場合で44.1%、「高校・専門学校・短期大学卒業」の場合で44.6%と、こちらもほぼ差がありませんでした。やりとり遊びの頻度は、母親の就労や最終学歴といった家庭の状況に関わらないことが明らかになりました。

また、やりとり遊びをよくする母親の方が子どもや子育てに対する肯定感が高いこと、子どもを尊重したり、子どもの思考を促したりするなどの態度をとる割合が高いことも、本調査からわかりました（図表略）。

出典：「幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査（4～5歳児）」（2014）
調査対象：4歳児～5歳児をもつ母親1,074名
調査時期：2014年1月
調査地域：全国
調査方法：郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）
調査項目：子どもの生活時間／子どもの学習準備／母親の養育態度／母親の関わりなど

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。ぜひご活用ください。▶ http://berd.benesse.jp/

調査データを踏まえ、園ができる支援について考える

子どもとの時間を楽しむ中で学びの土台が育まれていく

今回の調査は、家庭で行われるやりとり遊びの頻度、そしてやりとり遊びと、小学校以降の学習の土台になる「学びに向かう力」との関係などを明らかにしました。これを踏まえて、家庭でのやりとり遊びを園はどのように支援するとよいか、目白大学人間学部子ども学科の荒牧美佐子先生にうかがいました。

目白大学　人間学部 子ども学科専任講師
荒牧美佐子
あらまき・みさこ
専門分野は発達心理学。乳幼児をもつ母親の育児感情、園における子育て支援の効果検証、幼児期の家庭教育が子どもの発達に与える影響などについて研究を行う。

やりとり遊びには特別な知識やスキルは不要

今回の調査では、多くの母親が子どもと言葉遊びをしたり、一緒に数を数えたりといったやりとり遊びをしていることがわかりました（P.14図1参照）。また、やりとり遊びの頻度と、母親の就労の有無や最終学歴は相関がないことも明らかになりました（P.16図4・5参照）。幼児期のやりとり遊びは、保護者に特別な知識、時間をかけた準備やコストが必要なものではありませんから、日常生活の中で子どもに関心をもち、自然に関わっていく中でどの保護者にもできるものと言えるでしょう。

そしてやりとり遊びの頻度が、子どもの「学びに向かう力」や「文字・数・思考」といった、小学校以降の学習の土台となることが確認できました（P.15図2・3参照）。

義務で取り組むのではなく楽しむことが大切

やりとり遊びは「こういう手順でやらなければいけない」といったものではありません。大切なのは、親子で楽しむことです。ですから、保護者に対して「学びに向かう力を育むために、やりとり遊びをしてください」とあまり強く求めすぎると、家事や仕事で忙しい中で「毎日○分やりとり遊びをしなければ……」と、いつの間にか遊びが義務になってしまい、保護者にとっても子どもにとっても楽しい時間ではなくなってしまうでしょう。園からは、保育者が子どもたちとふだんやっているやりとり遊びの例を紹介しながら、「親子で楽しむことが一番大切ですよ」と気軽に取り組めるようにアドバイスしていただきたいと思います。

やりとり遊びは、「小学校の勉強の先取り」などではありません。成果を求めたり、ゴールを設定したりせずに、園で覚えた遊び歌を一緒に歌いながら、言葉のリズムを感じるなど、あたたかな親子関係の中で楽しむものであることを、遊びの中での学びを支援する保育者のみなさんから伝えてください。

子どもが「学びたい、知りたい」と思う意欲や、粘り強く取り組もうとする気持ちは、日常生活で保護者と深く関わったり、友だちと遊んだりする中で育まれていくものです。そして、幼児期における「学びに向かう力」と「文字・数・思考」の力は、くっきりと分かれているものではなく、互いに関連し合って存在し、そして子どもの内面で統合的に伸びていくものです。どれかひとつを選んで伸ばしていくようなものではなく、愛情をもって保護者が関わることで、バランスよく伸びていくものだということを、保護者のかたに理解していただくことはとても大切だと思います。そして、保護者のかたがやりとり遊びを通して、子どもを興味深く見つめていくことで、その成長や変化をより敏感にキャッチできるようになるでしょう。